

幼稚園教諭や保育士がもつ自閉スペクトラム症への顕在的 および潜在的態度

(中間報告)

関西福祉科学大学心理科学部 津田 恭 充
奈良教育大学教職開発講座 堀田 千 絵

The explicit and implicit attitudes of kindergarten teachers and childcare workers toward autism spectrum disorder.

Department of Psychological Sciences, Kansai University of Welfare Sciences,

TSUDA, Hisamitsu

School of Professional Development in Education, Nara University of Education,

HOTTA, Chie

要 約

教員や保育士がもつ自閉スペクトラム症(ASD)への態度は教育や保育の質に影響するため、ASDへの偏見を理解し解消することは重要な課題である。本研究では、幼稚園教諭や保育士がもつASDへの態度を調査することを目的とする。接触仮説に基づけば、ASDと日常的に接している教諭や保育士のASDへの偏見は弱いと予測できる。ただし、ASDへの対応に困難を感じている教諭や保育士はASDに強い偏見を抱いている可能性がある。偏見を調査する際、一般的には質問紙調査が用いられるが、質問紙調査では本心を偽って回答できるうえに、本人も自覚できない潜在的な態度はとらえられない。この問題を解決するために、本研究では質問紙調査に加えて潜在連合テストを用いてASDへの態度を測定する。

【キー・ワード】 自閉スペクトラム症, ステレオタイプ, 偏見, 潜在連合テスト, 接触仮説

Abstract

The attitudes of teachers and childcare workers toward Autism Spectrum Disorder (ASD) affects the quality of education and childcare; it is, therefore, important to understand and eliminate prejudice against ASD. This study purposes to investigate the attitude held by kindergarten teachers and childcare workers toward ASD. The contact hypothesis allows the prediction of reduced prejudice displayed by teachers and caregivers in daily contact with ASD. However, teachers and childcare workers who find it difficult to deal with ASD are likely to be biased. A questionnaire survey is generally used to investigate prejudice, but respondents can

deceptively answer such instruments to conceal their true beliefs, and such surveys cannot apprehend implicit attitudes of which respondents are unaware. The present study resolves this problem by conducting an Implicit Association Test in addition to a questionnaire survey to measure attitudes toward ASD.

【Key words】 autism spectrum disorder, stereotype, prejudice, Implicit Association Test, contact hypothesis

問 題

教員のもつ ASD への態度は、ASD への介入がうまくいくかどうかに影響を与える (McGregor & Campbell, 2001)。また、日本では障害者差別解消法が 2016 年に施行され、(発達障害を含む) 障害を理由とする差別が法的に禁止された。これらの理由から、障害に対する態度や偏見および差別を解消するための研究が重要性を増しているといえる。

偏見を低減するための代表的理論に接触仮説 (Allport, 1954) がある。これは、偏見は知識の欠如が原因であり、相手との交流を通じて実際の姿を知ることで偏見を低減できるという仮説である。ただし、接触によって常に偏見が低減されるかというところではなく、接触が有効に機能するには条件がある。具体的には、地位の対等性、協同 (目標の共有と協力)、社会的・制度的支持 (法律や制度、規範による支持と強制)、情報を得たり親密な関係を築くのに十分な頻度・期間・内容を伴った接触などが重要であることが明らかにされている (北村・唐沢, 2018, pp.82-84)。

特別支援教育に携わっている教員などは、そうでない人よりも ASD との接触経験が多いといえるが、彼らは全体的に ASD に対してポジティブな態度をもつことが報告されている (Chung et al., 2015, Flood et al., 2013, Olley et al., 1981)。日本ではそうした専門家を対象とした数量的研究は見当たらないが、類似した研究として田実 (2007) がある。田実 (2007) は、大学 1 年生を対象に自閉症に関する文献購読を 1 年間続けた結果、学生の「無理解的偏見性」の得点が低下したとしており、正確な知識を獲得することが無知に基づく偏見を低減させることを明らかにした。これらは接触仮説を間接的に支持するもので、ASD への偏見の低減に接触や学習が有効であることを示唆している。

ただし、上述の研究はすべて質問紙調査を用いた自己報告に基づいているということに注意する必要がある。一般的に、人は特定の対象への態度について社会的に望ましいとされるような回答をする傾向があり (Edwards, 1953)、それは実際の態度を十分に反映していない可能性があるためである。NHK (2019) が行った日本における障害に対する世論調査では、「自分自身に障害のある人への差別や偏見があると思うか」という質問に対して、「かなりある」と答えた人は 3.3%、「ある程度ある」と答えた人は 21.9%であった。一方、「今の日本の社会に障害のある人への差別や偏見があると思うか」という質問では、「かなりある」と答えた人は 17.8%、「ある程度ある」と答えた人は 59.5%で、自分自身に対する回答と日本社会に対する回答には乖離が見られた。この調査は電話調査であり、質問紙調査よりも社会的望ましさのバイアスが強くかかった可能性があるが、いずれにしても、このデータは障害に対する態度を自己報告してもらおうと社会的に望ましい方向に偏りがちであることを示

している。このことから、障害への差別や偏見は改善されたように見えても表面的なものにとどまっている可能性もあり、広い視野でとらえることが重要であるといえる。

社会的望ましきのバイアスの問題を解決することができる有望な方法が、Greenwald et al.(1998)の開発した潜在連合テスト (IAT: Implicit Association Test) である。IAT とは、単語の分類課題にかかる時間をミリ秒単位で測定することで、概念間の結びつき (連合) や、ある概念とそれに対する評価の結びつきの強さを調べる実験である。IAT は、その理論的背景や実験手法を熟知している者以外には、どのような反応がどのような結果につながるのかわからないため、社会的に望ましい結果を意図的に作り出すことができない。この特徴を生かし、偏見などの社会的望ましきのバイアスを回避する必要がある現象を研究するために IAT は広く活用されている。一般的に、自己報告式の質問紙調査によって測定した態度を顕在的態度 (意識的な態度)、IAT によって測定した態度を潜在的態度 (無意識的な態度) と呼んで区別する。態度がその後の行動を予測できるかどうかは重要な問題であるが、IAT などによって測定した潜在的態度は顕在的態度よりも偏見に基づく行動や判断をよく予測できる (Greenwald et al., 2009)。また、顕在的には偏見が弱いが潜在的には強い偏見をもっているといった顕在・潜在間のギャップについて検討することも可能であり、IAT には大きな利用価値がある。

こうした背景を踏まえ、本研究では、日本で ASD の教育や保育にかかわっている幼稚園教諭や保育士がもつ ASD への態度を顕在・潜在の両面から明らかにすることを目的とする。接触仮説に基づけば、彼ら (彼女ら) は全体的には ASD に対してポジティブな態度を有すると予測できる。ASD への対応に強い困難感を抱いている場合は ASD に対してネガティブな態度を有していると考えられるが、彼ら (彼女ら) は専門家であるため、顕在的にはネガティブな態度を表明しないようにしている可能性もあり、このことについて強い仮説はない。一方、潜在的態度については、ASD への対応に強い困難感を抱いている場合、顕在的にネガティブな態度を表明しているかどうかにかかわらずネガティブであると考えられる。

方 法 (予定)

調査対象者

ASD やその疑いのある子どもの教育や保育にあたっている幼稚園教諭と保育士 60 名を予定している。

調査内容

デモグラフィック要因 年齢、性別、ASD やその疑いのある子どもの教育や保育の経験年数への回答を求める。

顕在的態度 林 (1978) による 20 組の形容詞対 (例: かわいらしい—にこらしい) を用いて、ASD の児童および定型発達児への印象を SD 法で評価してもらう。

潜在的態度 IAT から派生した実験である Single-Category IAT (SC-IAT; Karpinski & Steinman, 2006) を用いて ASD への潜在的態度を測定する ASD SC-IAT を作成し、調査対象者に実施してもら

う。

ASD やその疑いのある子どもへの対応への困難感 ASD やその疑いのある子どもへの対応への困難感を測定する尺度を新たに作成し、回答を求める。

倫理的配慮

調査・実験の内容と目的を園に説明し、事前に了解を得て実施する。調査対象者には、調査・実験への参加は任意でありいつでも中断できること、得られたデータは統計的に処理され個別のデータが取り上げられることはないことを十分に説明したうえで実施する。なお、本研究は第一著者の所属機関の研究倫理委員会の承認を得ている。

引用文献

- Allport, G. W. (1955). *The nature of prejudice*. Cambridge, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company.
- Chung, W., Chung, S., Edgar-Smith, S., Palmer, R. B., Delambo, D., & Huang, W. (2015). An examination of in-service teacher attitudes toward students with autism spectrum disorder: Implications for professional practice. *Current Issues in Education, 18*. retrieved from <https://cie.asu.edu/ojs/index.php/cieatasu/article/view/1386>
- Edwards, A. (1953). The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed. *Journal of Applied Psychology, 37*, 90-93.
- Flood, L. N., Bulgrin, A., & Morgan, B. L. (2013). Piecing together the puzzle: Development of the Societal Attitudes towards Autism (SATA) scale. *Journal of Research in Special Educational Needs, 13*, 121-128.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Poehlman, T. A., Uhlmann, E., & Banaji, M. R. (2009). Understanding and using the implicit association test: III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology, 97*, 17-41.
- 林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), *25*, 233-247.
- Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology, 91*, 16-32.
- 北村 英哉・唐沢 穰 (2018). 偏見や差別やなぜ起こる？心理メカニズムの解明と減少の分析 ちとせプレス
- 田実 潔 (2007). 「購読演習」による自閉症イメージ形成の可能性について：教授法(FD)の観点か

ら 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 44, 109-118.

McGregor, E. M., & Campbell, E. (2001). The attitudes of teachers in Scotland to the integration of children with autism into mainstream schools. *Autism, 5*, 189-207.

NHK (2019). 「障害者共生社会に関する世論調査」単純集計結果 retrieved from https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190729_1.pdf

Olley, J. G., DeVellis, R. F., DeVellis, B. M., Wall, A. J., & Long, C. E. (1981). The autism attitude scale for teachers. *Exceptional Children, 47*, 371-372.

